

脚本添削スペシャル応募作品

言い訳ばかりしている主人公が結果を出して  
言いたいことを友人に伝える話。

## 敗者へ贈る言葉

作・KYKY

登場人物

アツシ (13)  
シンヤ (13)

ゲーム好きな中学生。  
アツシの友達。

沙織 (40)  
先生 (43)

アツシの母。  
アツシの担任の先生。男性。

○中学校、教室

起立して先生(43)に怒られているアツシ(13)。

アツシ「でも先生、昨日シンちゃん家に持ってって勉強したから…」

先生「はいまた言い訳する。忘れたのには変わりないだろうが」

起立したまま黙って俯くアツシ。

その隣の席で笑うシンヤ(13)

○駅前、ゲームセンター

そこそこ賑わっているゲーセン内。格闘ゲームで対戦しているアツシとシンヤ。

アツシのキャラがコンボを決められて負け、アツシは席を立ち対面に座っているシンヤのところへ。

アツシ「シンちゃんずるいよそのコンボ、それ無理じゃん」

シンヤ「対応できないアツシが悪い。それに、負けて言い訳はみっともないぜ。今日も先生に言い訳してたしな」

アツシ「ぐっ：(口をつぐむ)」

シンヤ「言いたいことがあるなら勝ってから言ってくれ。ハハハ」

アツシ、シンヤの言葉にムツとした表情。

アツシ「わかったよ、勝てばいいんだろ勝てば。見てろよシンちゃん。俺ヴァルブレの特訓するからな(筐体を指差して)」

シンヤ「お、やる気だねえ」

アツシ「そこですわね：シンちゃん、いやシンヤ師範。俺にさっきのコンボ教えてくださいお願いします。コーラ一本でどう？」

シンヤ「うむ、いいだろう。だがワシの修業は厳しいぞ？」

一礼するアツシ。自販機へと駆けていく。

○アツシの家、自室、夜

ノートのメモを見ながら家庭用の格ゲーでコンボ練習するアツシ。しかし失敗してしまう。

そこへ沙織(40)が晩御飯を持ってやってくる。

沙織「もうゲームばっかやって：宿題は？」

アツシ「うるさいなあ。後でやるって」

沙織「その言い訳にも飽きたんだけど：やる気ないなら初めからそう言いなさい。男のくせにみっともない」

アツシ「うるさいって言うてるだろ！」

アツシが叫び、沙織は溜息と共に夕飯をアツシの机に置いて部屋を出ていく。

沙織「はあ：全くあの子は：引越し先でも勉強ついていけるかしら」

ドアを閉めつつ呟く沙織。

○駅前、ゲームセンター、夕方

アツシと高校生が対戦している。アツシがシンヤに教えてもらったコンボを決めて勝つ。シンヤそれを後ろから見ている。

シンヤ「ふーん、けっこう出来るようになってきたね」

アツシ「(振り向きつつ)シンヤ師範の特訓のおかげっす！」

シンヤ「まだまだ成功率低いけどな」

アツシ「でもだいたい勝てるようになってきたし、これで来月の大会に出られるくらいのレベルになったかも！」

シンヤ「未熟者！己惚れるでない！！それに俺また新しくコンボ開発してるから：このコンボはもう卒業だな」

アツシ「えっ、シンちゃんもうやらないの？」

シンヤ「俺はな。ま、アツシはまだそのコンボ練習してなよ、

ハハ。大会で俺の新コンボでまたボコってやるよ」

アツシ、ムツとして席を立つ。

アツシ「もう帰る。それ続きやっついていいよ、じゃね」

そう言ってカバンを持ちゲーセンから出ていくアツシ。

シンヤ「：」

暫くアツシを見送り、空いた席に座って対戦を始めるシンヤ。

○アツシの家、食卓、夜

沙織とご飯を食べているアツシ。沙織は暫くアツシを見ているが、目が合う。

アツシ「：何？何か言いたいことあるの？」

沙織「：まあ、そうだね」

アツシ「なんだよ」

沙織「：引越すことになったの。お父さんの仕事の都合で」

アツシ「は？」

沙織「○○県にね：急な話で悪いけど」

アツシ「マジで？いつ？」

沙織 「来月の十日くらいにね。荷物纏める段ボールもらって  
くるから、ちゃんとその時までには荷造りしとくのよ」

アツシ「でも来月ってそんな…急に言われても困るんだけど！」

沙織 「ごめんねアツちゃん。でも決まったことだから…」

言い終わらないうちにアツシは箸を置いて部屋を出る。  
一人残された沙織、溜息をつき天井を見上げる。

#### ○駅前、ゲームセンター

対戦をしているアツシとシンヤ。浮かない表情でプレイ  
するアツシ。シンヤが勝つ。アツシ、席を立ちシンヤの  
隣へ。

シンヤ「今日は調子悪かったじゃん」

アツシ「…シンちゃん、俺…」

シンヤ「はい、ストロップ。言いたいことは勝つてからでしょ？」

アツシ「…そうか、そうだよね」

アツシ、カバンを持ってゲーセンから出ていく。きよと  
んとした顔で見送るシンヤ。

#### ○学校、教室

ホームルーム中、先生が生徒たちに連絡事項を話してい  
る。

先生 「えー、それと、急な話ですが来月、アツシ君が転校す  
ることになりました」

どよどよとざわめく教室。シンヤ、驚いた顔でアツシを  
見ている。

先生 「なので送別会をしようと思います…実行委員は…」

先生の言葉と教室のどよめきの中、アツシは隣のシンヤ  
を一目見る。シンヤ、目が合うとすかさずアツシに問い  
かける。

シンヤ「…転校ってマジかよ」

アツシ「…うん」

シンヤ「なんで言わなかったんだよ」

アツシ「…」

シンヤ「何とか言えよ！」

アツシ「俺、シンちゃんにまだ一回も勝ってないから」

シンヤ「え？」

アツシ「言いたいことがあるけど、勝ってないから…」

シンヤ「…どこに引越すんだよ」

アツシ「○○県のなんだっけ…なんとか市っていうところ。ゲ  
ーセンにヴァルブレあるといいけどな…せっかくコンボ練習  
したし」

シンヤ「…」

アツシ「シンちゃん、今度の大会出るだろ？」

シンヤ「…出るよ」

アツシ「じゃあそこで練習の成果見せてやるから」

シンヤ「…」

チャイムが鳴り、先生の「起立」の号令が教室に響く。  
礼をして帰宅する生徒達。数人がアツシの所にやってく  
る。雑談しながらアツシは帰っていく。  
シンヤ、それを目で追うも声をかけず机に座ったまま。

○駅前、ゲームセンター

『第15回ゲームセンター高宮、ヴァルブレ大会』の垂  
れ幕が下りている店内。大人数で賑わっている。アツシ  
とシンヤも参加し、それぞれ勝ち進んでいく。

二人はコマを進め、決勝で対決することになる。二人は  
実況の説明を受けてから対戦台へと向かう。

アツシ「…シンちゃん、今日は俺勝つからな」

シンヤ「…やってみるよ」

短く言葉を交わした二人は席へと着く。深呼吸をしてレ  
バーを握るアツシ。いよいよ決勝戦が開始される。

アツシ「…(シンちゃんは俺の手を全部読んではず。なら…)」  
アツシ、普段とは違う立ち回りをし、シンヤの不意を突  
く。ペースを乱されたシンヤは二ラウンド立て続けに取  
られる。

シンヤ「…」

深呼吸をするシンヤ。ペットボトルの水を飲み、二試合  
目を始める。落ち着いたシンヤはアツシの不意打ちも的  
確に対処し、アツシの隙を見つけ新コンボを決める。

アツシ「…」

そのまま押され、負けてしまうアツシ。その後のラウン  
ドもシンヤの新コンボに太刀打ちできず、あつという間  
に二ラウンド取られてしまう。盛り上がる会場。

アツシ「…(落ち着け、俺。シンちゃんは今なので俺が対応でき  
ないと思っただけだ…)」

アツシ、深呼吸してからレバーを握る。

アツシ「(狙いは…コンボ始動の立ち中パンチ…アレを返せば)」

最終試合が始まる。アツシ、攻めるふりをしてシンヤの攻撃を誘う。攻防の末お互いの体力が少なくなる。

シンヤ「くっ…！なら！」

一気にとどめを刺そうとするシンヤ。だが新コンボの隙をついてアツシはシンヤに教えてもらったコンボで勝つ。

シンヤ「あっ…！」

実況の声で拍手に包まれる会場。席を立つアツシとシンヤ。黙って握手をする二人。

シンヤ「…負けたよ。アツシ…でも俺…」

アツシ「…シンちゃん、言いたいことがあるなら勝ってから。

そうでしょ？」

シンヤ、苦笑しつつ

シンヤ「…そうだったな」

アツシ「じゃあ言わせてもらおうわ」

シンヤ「…」

アツシ「…今まで教えてくれてありがとう。またいつか対戦しよう」

シンヤ「…！」

アツシ、実況から表彰され会場の皆にお辞儀をする。シンヤ黙ってアツシに拍手を贈る。

○シヨッピングモール、ゲームセンター

人の多い賑やかなゲームセンターでアツシは大人相手に格闘ゲームで対戦している。アツシはシンヤのコンボを決めるも、逆転負けしてしまう。

相手「ふう…危ない危ない。いやあ、君ヴァルブレ強いね」

相手の大人の男性は席を立ちアツシに話しかけてくる。

アツシ、ニコツと笑って答える。

アツシ「はい、僕の負けですね」

二人の試合を観ていたもう一人の大人がアツシの後ろから声をかける。

大人2「まあまだ子供だしね、しょうがないしょうがない。お前もあんまり本気出してイジメるなよ？」

相手「いや、マジでやってたよ。まぐれ勝ちみたいなもんさ」

アツシ、その言葉を聞いて首を横に振る。

アツシ「いえ、負けは負けですから。対戦ありがとうございますました」

大人2「偉いねえ、素直で。じゃあ次俺とやってよ」

アツシ、頷いて対戦台に百円玉を入れる。

二人の対戦が始まり、嬉しそうに対戦するアツシ。

終わり